

100th ANNIVERSARY 2007

東北大学百年史 編纂室ニュース

第11号 2005.12.1

理学研究科・理学部史編纂を終えて

理学研究科教授・元理学部史編纂委員会委員長 山口 晃 ————— 2

●点描・百年史

東北大学洗心寮

— 昭和40・50年代東北大学生の精神史の一面 —

東北大学名誉教授 片野 達郎 ————— 4

刊行計画の変更について・受贈図書一覧 ————— 7

百年史編纂室日誌抄録 ————— 8



TOHOKU
UNIVERSITY

表紙写真解説

選鉱製錬研究所

選鉱製錬研究所は昭和16年(1941)3月27日、勅令第268号により、重要金属の選鉱(鉱石の選り分け)と製錬に関する学理・応用を目的として設置された附置研究所である。写真は昭和17年12月、仙台市長町に建設された木造2階建ての本館で、昭和30年代頃のものとみられる。

同研究所は昭和43年(1968)に片平地区に移転し、平成4年(1992)4月10日に素材工学研究所となり、同13年(2001)4月1日、多元物質科学研究所へ再編・統合された。

(東北大学史料館所蔵)



理学研究科・理学部史編纂を終えて

理学研究科教授・元理学部史編纂委員会委員長

山口 晃



理学研究科・理学部史は今年（平成17年）4月に『東北大学百年史』第五巻「部局史二」として、刊行された。理学研究科・理学部の部局史編纂委員会が立ち上がったのは平成8年である（今年の2月に最終原稿として百年史編纂室から部局史編纂委員会の委員名簿の提出を求められて分かったことだが、実を言えば、理学部事務にはこのときの委員会委員名簿の資料が残っていないようだ）。私が委員長になったのは平成12年4月である。ずいぶんと前から委員会はスタートしていたのだが、実質的に部局史原稿作成、編纂作業を始めたのは原稿締め切りの1年ほど前、平成14年4月頃からである。この頃から、部局史編纂委員の方々が各専攻・学科での原稿作成、編集等に本格的に携わったことになる。しかし、原稿がなかなか集まらず気苦労が絶えなかった。

原稿提出を平成15年4月末頃に終えたが、刊行までに2年間を要した。この間、東北大学百年史編纂室では原稿の一つ一つのデータ・資料の裏取りをする大変な作業が行われていたのである。こちらもそれに応えるべく調査に多大の時間を費した。資料がしっかり整理・保存されていれば、編纂作業も楽に進んだであろう。このままでは、この先の50年史、さらに100年史を著すのは大変な労苦を伴うことになる。次の世代への遺産を確かなものとして残さなくてはならない。これから先、資料の整理・保存に力をいれる必要がある。

ここで話を逸らすと、東北大学の前身は明治44年（1911）開設の東北帝国大学理科大学である。理学がまだ十分に芽生えていない当時としては、理科大学の開設は異例であったと思われる。このとき、数学科、化学科、物理学科の3学科が設置された。物理が独立した学科として設置されたのは、全国初である。ここに東北大学の存在の大きな意義がある。理学の特色である新しい風を取り入れ、新しいものを生み出す気風は当時から存在した。この理念は「研究第一主義」、「門戸開放」として定着した。理念の歴史的背景は、『東北大学百年史編纂室ニュース』第6号（2000.8）で、また理念と東北大学の使命・方針・教育目標については『広報』No.205（2001.12）で馬渡尚憲教授（当時）が述べられているので、参照されたい。

東北大学理学研究科は現在では全国、いや世界有数の研究組織である。外国では、研究大学と位置づけられているほどである。第一線で活躍する研究者が多数いる。1つの研究が終われば後を振り返らず、次の研究を始める。資料などを整理・保存する“後かたづけ”の時間的余裕を持たない。ほとんどの人がその煩わしさを感じ、「史料」として残すことに関心を持たない。これが大方の研究者である。また、部局には資料の保存に従事する特別な人もいない。数十年も経てば、人もかわり、実験装置は廃棄、資料等も破棄され、記憶から消える（冒頭に述べた

部局史編纂委員会委員名簿の件はこの象徴である。

ヨーロッパの古い大学に行くと、例えば、コインブラ（ポルトガル）、ラフバラ（イギリス）、パヴィア（イタリア）、パドヴァ（イタリア）...といった地方の大学さえ、近世の実験器具が残されており、展示されている。歴史の浅いアメリカの大学・研究所はことさら資料の保存に熱心である。欧米の大学・研究所では資料請求に即座に答えてくれる担当職員に困ることはない。また、資料室の広さにも驚かされる。



東北帝国大学 理科大学本館（明治44年頃）

日本とのこの違いはどこから来るのであろうか。「紙と木」の文化と「石」の文化の違いであろうか。パリやミラノコレクションの斬新で魅力的なファッションも1日にして出来るものではない。ルネッサンスから現代までの美術に日常的に触れる環境が新しいものを生み出す源と考えられる。理学もしかりである。過去の積み重ねの上に新しい発見・発明がある。東北大学でも過去の偉大な遺産の保存・展示を充実させてゆくことが必要である。それらに日常的に触れる教育から人材が育まれ、大きな花を咲かせることができる。なお、東北大学における実験と実験器具の保存については、『東北大学百年史編纂室ニュース』第3号（1999.1）に吉田忠教授（当時）が外国と比較して述べられているので、参照されたい。

日本の大学のすべてがそうだとは言わないが、多分に一流の大学には一流の公文書館（図書館・資料館）がある。あるいは一流の研究分野を有する大学ではその関連する図書・研究資料が第一級である。東北大学は史料館（大学アーカイヴズ）を一流のしっかりしたものにせねばならない。やがてそれは、新しいものを生み出す源となるからである。幸い、東北大学には広報・情報部がある。部局にも昨年、広報室が設けられた。史料館とこれらが連携して、諸資料の整理・保存を行い、大学アーカイヴズを確立されたいと願うものである。今後の発展を見守りたい。

ここで話をもとに戻すが、編纂作業ではさらに種々の問題も生じた。全体の構成や語法についてである。例えば、物理では公の「講座」名で研究の分類をせず、実際的な研究内容で研究分野を分類し、その下に関係する講座名をのせた。このような問題は当初、百年史編纂室の意見と相容れないものがあり、編集について話し合いが何度も持たれた。この話し合いは非常に有効に機能し、ようやく刊行の運びとなった。『東北大学百年史』第五巻全943ページの内550ページ（1ページ954文字）を占める労作である。ここに、労苦を共にされた、百年史編纂室の方々、部局史編纂委員の方々、原稿執筆者の方々、他編纂作業に協力された方々に感謝申し上げる。

点描・百年史

東北大学洗心寮

— 昭和40・50年代東北大学生の精神史の一面 —



東北大学名誉教授 片野 達郎

はじめに

平成17年(2005)5月14日、洗心寮の創設者、小野寺信雄氏の三回忌(5月13日)に、旧洗心寮出身者のうち15名が全国より気仙沼市に参集。墓参をはたし、あわせて、旧寮生の募金により発行した追悼文集『小野寺さんを偲んで』(B5判62ページ)と、小野寺さんが生前詠まれた俳句を精選、編集した『小野寺信雄句集』(B6判112ページ)を墓前に供えた。小野寺さんは気仙沼出身で、晩年は、宮城県県議会議長や気仙沼市長を務められた方である。当日集まった旧寮生の中には、卒業後30年ぶりで再会する人たちもいた。

1. 洗心寮の創設

仙台市青葉区宮町3丁目8の51、JR仙台駅のほぼ真北、国道45号線から東照宮に至る宮町通りから、西に入った住宅街に東北大学洗心寮があった。寮といっても大規模なものではなく一軒家で、一時に入居出来る寮生の数は5、6名であった。実はこの家は、歯車研究の第一人者東北大学名誉教授成瀬政雄先生の自宅で、小野寺邸に隣接しており、退官後仙台を離れるに当たり小野寺さんが買い取り、東北大生に寮として提供したものである。小野寺さんは、太平洋戦争直後の学生時代、京都天龍寺の関牧翁老師に参禅、その折大森曹玄師の道場に寄寓し、大恩を受けたことがあり、その恩返しの気持から、若者育成の助力を思い立たれたという。入寮の条件は、毎朝坐禅を組むことであった。寮は、



小野寺 信雄氏

昭和42年(1967)より平成6年(1994)まで28年間続き、41名の東北大生を送り出した。創設時、東北大学からは文学部の佐藤喜代治・北村晴朗教授と、教養部の片野が顧問として加わった。片野は、かつて鎌倉円覚寺に参禅し、東北大学に入学後は、出家して北山の輪王寺僧堂で雲水生活をした経験があったので、直接の指導を託された。

寮の維持については、小野寺さんが一切を負担され、朝夕の食事の賄いの人までつけて下さり、学生は寮費無料、光熱費と自分の食費を出すだけという至れり尽せりの好条件であった。しかも、小野寺さんは、寮の運営や学生の行動については一切干渉をせず、寮と隣接する自邸内に坐禅堂を建て、仙台におられる時は、早朝より学生とともに坐禅をされ、時には寮生たちを自邸に招いて食事を共に

し、歓談を楽しまれた。私も時々招かれたが、小野寺さんは、私がめぐり逢った人の中でも、そのスケールの大きい人柄、包容力、体力、気力、何をとっても羨望と信頼に足る大きな人であったように思う。

2．洗心寮の日常

寮の日常の生活は、朝6時起床、坐禅、読経。その後、坐禅堂、廊下、トイレ、庭などの清掃の後、朝食。あとはそれぞれの学部に通うという自由なものであった。しかし寮生は決して世間に甘えるということではなく、冬季木枯しの吹く夜には、拍子木を叩きながら町内の火の用心の夜廻りをしたり、夏休みには、近所の子供たちを集めて宿題を手伝いながら無償の家庭教師をしたり、地域にとけ込む生活をしたようである。寮の生活が羨しくて、自宅が仙台にあるのに入寮してきた学生もいた。ある学生は当時を回想し、「今振り返ると、寮の生活は本当に楽しい記憶に満ちている。毎朝6時から始まる坐禅堂での坐禅とその後の作務（さむ）。冬場、坐禅後の庭掃除をしている時に昇ってくる太陽が与えてくれたえも言われぬ暖かさ。寮の先輩、同僚、後輩との夜を徹しての議論。寮卒業の社会人先輩を巻き込んだ八幡宮どんと祭への裸参り、賄いのおばさんが作って下さる美味しい朝食と夕食。洗心寮での出来事は、どれをとっても私の中でキラキラと輝いている」と記している。



瀬峰陽岩寺坐禅堂

3．瀬峰、陽岩寺への参禅と田辺義山老師

洗心寮の年間の大切な行事として、宮城県栗原郡瀬峰町の陽岩寺禅堂の接心（せっしん・坐禅会）への参加があった。

陽岩寺は瀬峰町のはずれの山中にあり、寺といっても法堂（はっとう・本堂）はわずか二間四面の小寺で、庫裡も六畳と四畳半に台所の萱葺きの草庵であった。学生時代の私が参禅した昭和25年頃は、電気も井戸もなくランプの生活で、水は山中の湧き水を利用していた。住職の田辺義山老師は、若い頃より数多くの臨済宗系の僧堂で修業をつまね、多摩徳雲院の加藤耕山老師より印可を受けておられたが、俗世の大きな寺に出ることを厭われ、瀬峰の山中に独りこもられた方である。

この陽岩寺に立派な坐禅堂が落成したのは昭和40年（1965）で、老師の信者である東京の四元氏の寄附によるものであった。三十畳の禅堂と20余名の参禅者が宿泊できる諸設備の完備した建物で、その頃には、電灯がつき、井戸も掘られ、水道まで引かれていた。

私はかつて心に悩みを抱いて老師の門を叩いたが、当時は東北大学の教官として、若い純心な学生を教える立場になっていた。私は、洗心寮の学生と義山老師を結ぶ大きな役割を果たすことになったのである。陽岩寺の接心には、寮生以外の東北大生も多く参加し、また東京からの参禅者と一緒になることもあった。学生たちには、禅堂での起居の作法から粥の炊き方、薪割り、数々の作務（掃除や畑の仕事）のこなし方、鐘の叩き方や板（はん）の打ち方など教え、暁天4時の坐禅から夜9時の開



陽岩寺接心に参加した東北大学生
(昭和43年頃、前列左から片野教授、田辺義山老師)

枕(かいちん・就寝)まで、1日6時間の坐禅と老師への独参(どくさん)など、禅堂で一緒に過した。洗心寮生は、春休み、5月連休、夏休み、大学祭、臘八接心と、年5回、5日間、義山老師のもとに参禅したのである。

老師は、世の栄達を求めず、粗衣粗食に甘んじて仏に仕え、生涯を雲水として坐禅とその指導に専念された方であった。老師が「本来無一物」と言われる時はまさに実感があった。「本来無一物」がそこにいたからである。老師の言動の一つ一つは血のにじむ修業から生まれた成果であった。知識の集積ではなく体験を積み

あげて来た人の、一挙手一投足に全く嘘のない事実を、学生たちは目の前にすることができた。万卷の書を読破した教養人を偉いと思って来た学生たちにとって、人間に対する評価の基準が全く変わったのは、老師に参禅してからである。老師に対して学生たちは、畏怖と同時に、信頼と敬愛の念を深めていったようである。

小野寺さんといい、義山老師といい、洗心寮の学生たちは、短い学生生活の間に、実に素晴らしい人にめぐりあい、薰陶を受け、一般の学生が体験しえなかった東北大学での学生生活を享受したのであった。

学生たちにとって、洗心寮の生活は、若者として迷い悩みながらも、互いに切磋琢磨し、友情を育み、道を求めて輝かしい青春の一時期を過した時代であり、洗心寮こそは彼等のその後の人生の原点となった場であるといっても過言ではあるまい。いまその学生たちも、当時の小野寺さんの年齢をこえる年齢となり、日本の社会を支える一員として、文字通り「一隅ヲ照ラス」(最澄)存在として活躍をしつつある。

4. 洗心寮の閉寮

昭和42年、小野寺さんの御厚意によって閉寮し、多くの人材をこの世に送り出した洗心寮であったが、平成6年閉寮を迎えることになった。28年という月日の間に、社会情勢が大きく変化し、若者の意識も変って、参禅という一つの目的のもとに共同生活を営みながら自己を鍛錬していくという生活意識を持った学生が次第に乏しくなっていったからである。坐禅のない洗心寮はもはや存在の意義を失ったわけで、小野寺さんにおわびをして閉寮の措置をとり、旧寮生たちにもその旨を連絡した。洗心寮は、旧寮生にとっても心の拠り所であり、青春の砦であったことを思うと、その伝統を維持していけなかったことを、小野寺さんや旧寮生たちに詫びなければならない。

東北大学100年の中で、わずか28年であったが洗心寮が運営され、昭和40年・50年代の学生たちが真摯な生き方をした事実は、百年史の中にとどめておきたい歴史の1ページであるように思う。

『東北大学百年史』刊行計画の変更について

平成17年6月、百周年記念事業実行委員会から、百周年記念事業全体の見直しの一環として、百年史の刊行計画を再検討してほしい旨の要請がありました。これを受けて、7月4日に百年史編集委員会幹事会、同月26日に百年史編集委員会を開催し、刊行計画の再検討について審議をおこないました。

その結果、刊行計画全体を学術的事業に特化することとなり、『東北大学百年小史』『電子媒体版』の刊行を中止すること、『写真集「目で見る東北大学の百年」』は編集方針を変更して『資料4 画像編』として刊行することとなりました。

『東北大学百年史』は通史3巻、部局史4巻、資料4巻の全11巻構成となります。今後は下記の刊行計画のもと、編纂事業が進められてゆく予定です。

刊行計画（変更後）

平成15年度	部局史1(既刊)	資料1(既刊)
平成16年度	部局史2(既刊)	
平成17年度	部局史3	
平成18年度	通史1	部局史4
平成19年度	通史2	資料3
平成20年度	資料2	
平成21年度	通史3	資料4

● 受贈図書一覧（学外のみ掲載 平成17年1月～9月）

- | | |
|------------------------------------|---|
| 1月24日 中央大学より『中央大学百年史』年表・索引編 | 20日 大谷大学より『真宗総合研究所 研究紀要』第22号 |
| 3月3日 同志社大学より『新島研究』第96号 | 大谷大学真宗総合研究所より『研究所報』第4号 |
| 4月4日 立命館百年史編纂室より『立命館百年史紀要』第13号 | 23日 広島大学文書館より『広島大学文書館紀要』第7号 |
| 京都大学大学文書館より『京都大学大学文書館研究紀要』第3号 | 30日 立教大学立教学院史資料センターより『立教学院史研究』第3号 |
| 12日 東洋英和女学院資料室より『資料室だより』NO63、64、目次 | 6月8日 立教大学立教学院史資料センターより『国際環境の中のミッションスクールと戦争』 |
| 26日 関西大学年史編纂委員会より『関西大学年史紀要』第16号 | 10日 京都大学大学文書館より『京都大学大学文書館だより』第8号 |
| 5月9日 創価大学創価教育研究センターより『創価教育研究』第4号 | 28日 全国大学史資料協議会より『年史編纂の現状と展望』 |
| 11日 拓殖大学創立百年史編纂室より『拓殖大学百年史研究』第16号 | 8月9日 東京経済大学100年史編纂委員会より『東京経済大学の100年』 |

2005(平成17)年

● 1月

- 13日 大桃敏行教授(教育学研究科)調査のため来室
- 18日 百年史編纂室スタッフ会議開催
- 20日 吉原直樹教授(文学研究科)調査のため来室
- 21日 大桃敏行教授(教育学研究科)調査のため来室
- 26日 竹内峯名誉教授(理学研究科)調査のため来室

● 2月

- 1日 石田義光教授(東北学院大学)調査のため来室
- 9日 小林典男教授(金属材料研究所)調査のため来室
- 21日 百年史編纂室スタッフ会議開催
- 22日 庄野安彦名誉教授(金属材料研究所)調査のため来室
- 24日 山口晃教授(理学研究科)調査のため来室
- 28日 近藤尚武教授(医学研究科)調査のため来室
入間田宣夫教授(東北アジア研究センター)と資料WG
について話し合い
山口晃教授(理学研究科)調査のため来室
第22回百年史編集委員会開催

● 3月

- 14日 嶋章名誉教授(流体科学研究所)調査のため来室
- 31日 織原彦之丞名誉教授(サイクロトロン・ラジオアイソトープ
センター)調査のため来室
香川郁子室員・野田恵理室員(教務補佐員)退職
『東北大学百年史』五「部局史二」を刊行

● 4月

- 1日 佐藤健治室員・布谷陽子室員(教務補佐員)採用
- 19日 百年史編纂室スタッフ会議開催

● 5月

- 1日 吉葉恭行室員(教務補佐員)採用
- 6日 越後成志教授(歯学研究科)調査のため来室
- 11日 大藤修教授(文学研究科)調査のため来室
- 16日 百年史編纂室スタッフ会議開催
- 17~25日 空井護助教授(法学研究科)調査のため来室
- 26日 佐藤透助教授(国際文化研究科)調査のため来室

● 6月

- 3日 安達宏昭助教授(文学研究科)調査のため来室
- 13日 大西仁百周年記念事業実行委員長より刊行計画の再
検討についての要請
- 14日 平川新教授(東北アジア研究センター)調査のため来室
- 20日 百年史編纂室スタッフ会議開催
- 24日 安田延壽教授(理学研究科)調査のため来室
- 30日 通史専門委員会第2部会開催

● 7月

- 4日 百年史編集委員会幹事会開催(刊行計画の再検討について)
- 12日 刊行計画の見直しについて、大西仁百周年記念事業
実行委員長と今泉編集委員長との話し合い
- 20日 百年史編纂室スタッフ会議開催
- 26日 第23回百年史編集委員会開催(刊行計画の再検討について)

● 8月

- 23日 入間田宣夫名誉教授(東北アジア研究センター)調査
のため来室
- 25日 大藤修教授(文学研究科)調査のため来室
- 25~26日 高橋編纂員・吉葉室員、防衛庁防衛研究所へ資料調査
- 29日 百年史編纂室スタッフ会議開催
入間田宣夫名誉教授(東北アジア研究センター)調査
のため来室
- 30日 織原彦之丞名誉教授(サイクロトロン・ラジオアイソトープ
センター)調査のため来室

● 9月

- 7日 山田勝芳教授(東北アジア研究センター)調査のため来室
安達宏昭助教授(文学研究科)調査のため来室
- 9日 入間田宣夫名誉教授(東北アジア研究センター)調査
のため来室
- 12日 山田勝芳教授(東北アジア研究センター)調査のため来室
- 12~16日 柳原敏昭助教授(文学研究科)調査のため来室
- 13日 入間田宣夫名誉教授(東北アジア研究センター)調査
のため来室
- 15日 片野達郎名誉教授(教養部)来室。洗心寮関係資料を寄贈
- 20日 百年史編纂室スタッフ会議開催



百年史編纂室ニュースに関するご意見・ご感想等がございましたら、編纂室までお寄せ下さい。
また、東北大学に関する歴史的資料についての情報をご提供くださいますようお願いいたします。

東北大学百年史編纂室ニュース 第11号 発行日：2005年12月1日
編集・発行：東北大学百年史編纂室
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
TEL 022-217-5042
FAX 022-217-4998
(FAX番号が変わりました)
URL : <http://www.archives.tohoku.ac.jp/hensan/index.htm>
e-mail : hyakunen@bureau.tohoku.ac.jp